

<緒言>

筆者は、学生生活を通して水泳部競泳部門に所属し、競泳というスポーツに関わってきた。その中で、筆者の出身である長野県出身の競泳選手を目にすることが少なかった。長野県の競泳の発展のためには、大学生競技者が長野県の競泳を牽引していくことが必要であると考えた。さらに、大学部活動は、上下関係の中で、自分自身の役割を認識し、責任のある行動をとる必要があり、競泳の大学部活動は様々なことを学び成長できる場であると考えていた。こうした背景から、筆者は、より多くの長野県出身の競泳選手が大学部活動で活動し、長野県の大学生競技者数を増加させたいと考えた。そのためには、長野県の高校生競技者の大学部活動への継続要因を明らかにする必要があると考え、本研究に至った。本研究の目的は、現在競泳を行っている長野県の高校生の競技継続意思やその他の特性、大学部活動での競技継続要因を明らかにすることである。

<方法>

仮説として、「競泳から得る達成感が大きいほど継続意思が高い」、「良い環境で自身の成長を望んだり、実力を試したいという意思が高いほど継続意思が高い」という2つを挙げた。これらの信憑性を調べるために、長野県の高校生を対象に、質問紙調査を行った。競泳を継続している理由や大学部活動のイメージ、または練習環境などの項目を設定し、103人から回答を得ることができた。データの収集方法は、郵送法、留置法を採用した。また、単純集計とクロス集計を各項目で行った。クロス集計では、非継続意思者と継続意思者に分類した。

<考察・結論>

単純集計とクロス集計を各項目で行う際、現在競泳をしている理由に関しては、内発的要因と外発的要因に分類し、さらに内発的要因でも、競争・興奮要因、達成要因、技術・体力要因、身体的活動要因、享楽要因に分類し、外発的要因では、交友要因、集団・所属要因・社会的承認要因に分類した。大学部活動に対するイメージに関しては、情緒性、身体的活動性、環境性、技術・体力性、競争・興奮性、社会的承認性に分類した。現在競泳をしている理由の結果は、競争・興奮要因が重要な要因

になっている。また、外発的要因でも仲間の存在の集団・所属要因が重要な要因になっている。対照的に、社会的承認要因は、各項目と比較しても、その重要視する割合は低くなっている。内発的要因の中でも、重要視する割合が低くなったのは、身体的活動要因である。具体的には、ストレス解消、健康維持増進で、健康に関わる項目であり、健康を重要視する傾向はないことがいえる。また、試合や合宿で遠征したいという項目も重要視する割合が低くなっている。競泳を行うこと自体を目的としない項目は、重要視されていないことがいえる。大学部活動に対するイメージに関する結果は、「ややそう思う」「そう思う」と回答した割合が1番多かったのは、練習環境が整っているという項目である。対照的に、つまらなそうという項目の「ややそう思う」「そう思う」の回答は、2.0%であった。大半がつまらなそうと思っていないことがいえる。また、有意差が認められたのは、男女間、競泳を継続している理由の中で7項目、大学部活動に対するイメージの中で7項目、三県対抗競技大会の代表、非代表であった。

結論として、代表の機会を多くしたり、目標を明確に設定させることや成長を強く望むほど継続意思が高まるのではないかと推測した。また、競泳という競技の目的以外に、新たな目的を持つことが継続につながるのではないかと推測した。この推測に対して、遠征を増やすことや友達との出会いの機会を増やすことが有効であると考えられる。大会の競技の休憩中にレクレーションを取り入れ、選手間の交流の場を増やすことが友達との出会いの機会を増やすことにつながると提言した。また、大学生競技者との関係を持つ機会を増やし、大学生競技者への認識を高めたり、肯定的なイメージを高めることが大学部活動への継続を高める要因であると推測した。そのためには、大学生競技者が、長野県選手権の参加だけではなく、様々な大会に参加したり、新たに高校生と大学生の対抗試合などを設立するなど、高校生競技者と大学生競技者の接する機会を増やすことが必要であると推測した。これらを実現できれば、長野県の高校生の大学部活動への継続意思が高まり、長野県の競泳が活性化すると考えた。